笑う飛竜と歌時計

空飛ぶ貧乏騎兵隊

黒川裕子
Yuko Kurokawa

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

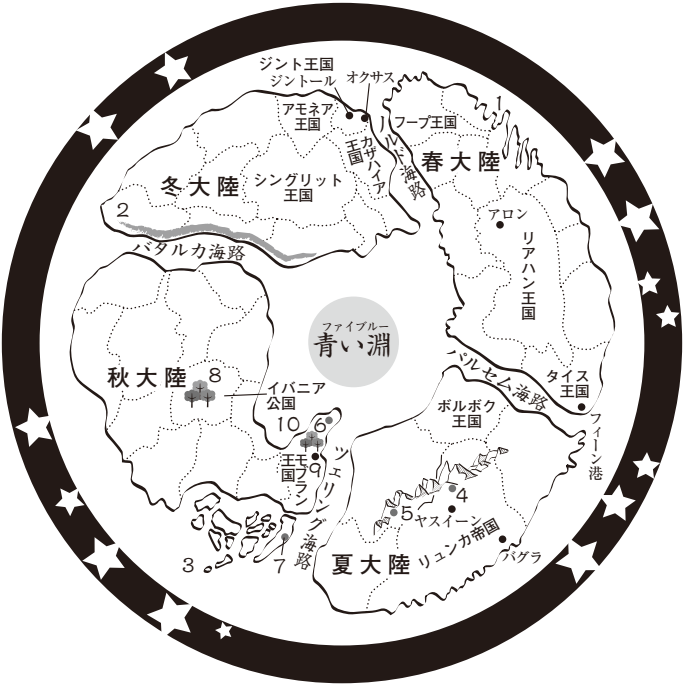
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画　上原た壱
地図　平面惑星

目　次

序　章　終わらない輪舞の終わりにあなたの名前を知るための眠り……7
第一章　夏至の花冠……12
第二章　鳳凰、暗黒の夏大陸へ……41
第三章　時計をなくした飛竜……57
第四章　鳳凰、荷馬車につめられる……89
第五章　「誘拐しちゃえばいいじゃないですか」……116
第六章　鳳凰、解雇になる……145
幕　間　ある時計守と鳳凰のお話……169
第七章　まだらか黒か……179
第八章　飛竜たちの婚姻……203
第九章　鳳凰、ぜんまいをくっつける……221
終　章　帰還……239
あとがき……254



1. のこぎり入り江
2. ゼムの護法防壁
3. 禁呪の島々
4. 竜の巣
5. リュンカ山脈
6. ゲイモス半島
7. ミゼルの壁
8. 永遠森（とわもり）
9. グラブス
10. 呪言の森

笑う飛竜と歌時計

空飛ぶ貧乏騎兵隊

序章 終わらない輪舞の終わりにあなたの名前を知るための眠り

生者にあらず、死者にあらず、
人にあらず、獣にあらず。鳳凰なり。

餌づけをしたあとは、こまめにブラシをかけて、
愛情表現をしてあげましょう。

深い深い海の底。青い淵のまだ底に、はてのない黒銀色の海があった。そこにぽつんと古い樫のテーブルがあった。テーブルの脚の長さはちぐはぐで、今にも倒れそうだった。テーブルの上には、遊戯盤と面に何も刻まれていない硝子のさいころ、そして二人分の紅茶のカップが置かれていた。傾いだテーブルの上でも、紅茶は一滴もこぼれない。紅茶は香り高い湯気を立てたまま、冷める気配もなかった。

テーブルを挟んで、モート・ハドリンの前には一人の青年が座っている。

闇皇子。またの名は時の悪魔という。創造主が生み落とした運命の二兄弟の片割れだ。

今は黒瑪瑙の膚と銀の瞳をした美しい青年の姿をまとっているが、さっきまでは、艶やかな赤い大蛇の舌先で、お茶をすすっていた。

モートはといえば、自分でもうんざりするほど似合わない衣装を着ていた。金と紺色を合わせたモール織りの長衣に、白いレースのヴェール。リアハン王国の伝統的な花嫁装束だ。頭には、瑞々しいライラックの花冠が飾られている。頬紅よりそばか

すの目立つ花嫁の顔は、今はテーブルより強ばっていた。

何せ、闇皇子は時間をあやつる。一度、それでひどい目に遭っているのだ。

（こいつがその気になれば、私なんて一瞬で骨まで朽ち果てるか、へその緒つきの赤ん坊に戻る……）

モートは、冷たい汗に爪先までまみれながら、何度もぎこちなく椅子を引きなおす。市場で売られている夕食用の羊の気分だ。ただし、闇皇子の口もとからは、意地でも視線をそらさない。

闇皇子が、やっと唇を開いた。

「それで、神と取引をしたいと？　では最後におれから謎かけを、ライラックの花嫁。おれの問いの答えが分かったら、弟を返してやろう」

「また謎かけ？」モートは、ヴェールを花冠ごと引きちぎりたい気分をやっと抑えた。

夏大陸に来てからというもの、さんざん悩まされてきた謎かけをいやでも思いだす。

あべこべ時計
鐘が消えるととたんに鳴りだす
時計盤の十二と三
なお、飛竜のタマゴの色はまだらか黒とのこと！

「勘弁してくれ、お兄さん。せっかく飛竜の一件が解決したっていうのに、今度は時の悪魔からの悪趣味な謎かけなんて」

「おい。怯えるか、闇皇子を馬鹿にするかどっちなんだ。誰が趣味の悪いお兄さんだ」

眦を尖らせた闇皇子は、青く染まった鋭い爪をテーブルに伸ばしてさいころを転がす。さいころが止まったとき、奇妙なことに、何も刻まれていなかった面に、数字ではなく小さな文字の連なりが浮き上がっていた。ジント語で〈花言葉〉とある。

「ははあ――」闇皇子が、顎をさすりさすり、モートの花冠をまじまじと見つめた。

「はははあって？　そのさいころは？」
　モートは不安そうに訊ねた。
「おれが最近つくった占いさいころさ。ただ青の淵に蓋をしておくのも退屈でな」闇皇子は自慢げに答えた。「こいつは、占う相手の今の状況に、いちばんふさわしい言葉を選ぶ。もっとも、おれが占うと、たいていは〈死〉と出るんだがね」
　恐ろしいことを言う。今にも泣きだしそうな顔で懇願した。
「やめてください、お兄さん。ジントを出発してから、ただでさえ何もかもめちゃくちゃなんだから。いくら何でも、これ以上の不運はごめんだ」
「あべこべに、めちゃくちゃ！」闇皇子が、先の割れた舌をちらちらさせて大笑いする。
「お前たち人間がめちゃくちゃでなかった例があるのか。いいから黙ってろ、この不細工なうずらめ。さあ、さいころの目にしたがって謎かけを出してやろう。お題はこうだ――」
　それから時の悪魔は歌うために唇を開いた。
　二人と、深い眠りにつく彼のほかは誰もいない海底の海に、濁った蜂蜜のような声が響く。

「一つ、見えもしないのに黄薔薇より香り、二つ、味もないのに喉ごしは茨を飲むよう。三つ、燃えたかと思えば凍え、四つ、肩にとまったかと思えば影のように過ぎ去る。五つ、私は追い、捕まえ、組み伏せ、鋭い怪物の爪であなたを刺し殺す。六つ、それでもあなたは私を欲します」

――さて、私は誰でしょう。

「……これで本当に最後なんだな？　答えれば、ランを連れて帰ってもいいのか」
　モートが真っ白なヴェールの下からにらみつける。
　闇皇子は、端正な面立ちにはそぐわない、野卑な笑みを浮かべた。

「好きにすればいい。これすらわからないなら、お前におれの弟を追いかける資格はない。何せ、この兄の声すらもう届かないのだ。創造主の子が、みずから望んで冬眠に入ったのだから」

「冬眠って、どれくらい眠るんだ？　十日ぐらい？　半年……それとも一年？」

恐る恐る訊ねたモートに、けたたましい哄笑が答える。

「おれたちの微睡みは長い、とくにあいつのは」闇皇子は首をかしげる。「前の前の世界で一度冬眠したときは、軽く千年ほど」

モートは絶望的な気分でうつむいた。闇皇子の嘲笑いが、足元の水面に白い泡沫を立てる。

「わかったか、今ごろぴいぴい騒いでも無駄なんだよ。弟はお前に嫌気がさしたんだ。おれが今すぐお前を消してやりたいと思っていることを忘れるな」

モートは歯を食いしばった。

「確かに私のせいなのかもしれない。それでも私は、ランティルギスカを連れて帰らなければならない。いや、連れて帰りたい」

「なぜ？」

「――部下だから」

「ふうん」闇皇子はクルル山の氷雪のような笑みを浮かべて、赤い舌をちろちろとひらめかせた。「つくづく身の程知らずの女め、おれはお前の都合に興味がない。おやじはなおさらだ。さあ、答えを！」

モートはからからになった喉で唾をのみこんだ。時の悪魔の謎ときに答えられなければ、ランを連れ帰ることはできない。やっとここまで来たのに。

見えないのに匂い、味もないのに茨を飲むようで、燃えたかと思えば凍え、肩にとまったかと思えば過ぎ去るもの。追い、捕まえ、組み伏せ、鋭い怪物の爪で突き刺すもの。それでも欲しいもの。

「……氷漬けの花……研ぎたての鉄剣。砲弾？　いや、その幻だ！　わかった――」

「ちがう、間抜け」闇皇子は、鼻で笑う。

「当てずっぽうはよせ。掌中にすべての答えがあるのに、お前は掌を開こうともしない。もっとも、おれの可愛い弟にはもっとわからないだろうが」
「もう一度考えさせてくれ！　私は諦めないぞ」
悲鳴のような声をあげたモートを、闇皇子はつまらなさそうに眺めた。
「それを諦めるのが人間だろうが。創造主でもないかぎり、お前らの人生は最後まで解けない謎そのもの。時間切れだ」
（そんな）
モートは唇を噛みしめ、膝の上に載せた両手で拳をつくった。
椅子の下に広がる海を見下ろす。
沈むこともない不思議な水面の向こう、水を透かして、さらに下のようすが見てとれた。ゆらめく黒銀色の水のあちらに、巨大で、この上なく優美な大鳥が、静かにからだを横たえていた。
太古の金属インブラでできた羽毛をときおり震わせ、ゆったりと呼吸を繰り返している。
鳳凰だ。虹色の鱗粉をはたいたような目蓋は、昼夜を忘れたように、かたく閉じられている。いいや、昼も夜もないのだ。太陽も月もない、創造主の衣にのみ照らされた青い淵、皇子たちの褥では。
ついこのあいだまで、確かにランティルギスカはモートのそばにいたのに。本当に、モートは、鳳騎兵隊は鳳凰に見限られてしまったのだろうか。
いいや、かならず起こしてみせる。たとえこんなに幸せそうな眠りを見たことがなくても……。
モートは、われながら巡りの悪い頭を必死で働かそうとした。ああ、時間を元に戻せたら。
ランティルギスカを失った日、いやせめて、すべての元凶となったあの夏至の日に。
眠る鳳凰に向かって、祈るように目を閉じる。
（教えてくれよ、鳳凰。お前を傷つけた馬鹿な私に）

さあ、私は誰でしょう。

第一章 夏至の花冠

新緑もまばゆいシルバーベルの月が、あと数日で終わろうとしていた。

鳳騎兵隊（フィーバレニードゥイエ）の隊舎は、王軍十隊のなかで一つだけジント城からぽつんと離れた森のなかにある。

朝、出勤した隊舎の扉の前で、モートは顔をしかめた。それでなくとも朽ちかけた扉に、矢が三本ばかり刺さっている。昨日は二本だった。

それだけではない。

苦々しい思いで、扉の前に盛られた土まんじゅうをにらむ。怪しすぎる。

鳳騎兵隊の隊員のうち、ランティルギスカは農家から新鮮な豆をわけてもらいにいっており、マロイ・ジャクスは私用で休暇をとっている。

モートは忌々（いまいま）しい土まんじゅうに触らないように扉を開けて、居間に向けて怒鳴った。

「おい、ヴァイ！　何だよこれ」

しばらく経（た）ってから、なかで物音がした。床に寝転がっていたヴァイレン・ノドックが、のそりと床から起き上がるのが隙間（すきま）から見えた。

身の丈六サント（約二メートル）もあろうかという大男が、生き返った死人のように、ふらふらと近寄ってくる。絨毯（じゅうたん）に押しつけていたせいで、自慢の顎鬚（あごひげ）にはみっともない寝癖がついていた。

あれほど口酸（くちす）っぱく注意しているのに、また自室の寝台ではなく居間の床で眠ったらしい。

〈騎士の中の騎士（ヤウェン・ネ・ヤウェン）〉、冬大陸で最強の剣士に贈られ

る称号を持つ男とは、到底思えない。
　見るからに二日酔いというむくんだ顔が、面倒そうに土まんじゅうを見下ろした。
「……おお。前にも見たことがあるぞ。ウェーウェだろうよ。確か、しつこい追っ手をかわして、家を護る守護のまじないだと」
「何だそれ」
「新月の晩にとってきた墓地の土と、ヴァンヴァン草の油、それに胎児の形をした植物の根のすりおろしを混ぜて……」
「ありがとう、わざわざ材料まで教えてくれて」
　モートは努めて冷静にさえぎる。
「しかしウェーウェのやつ、いなくなってもう十日目だぞ。子供じゃないんだから」
「ふむ。やつなりの好意かな？　それとも警告か」
「隊舎に墓土を盛って親切に警告？　猫に砂を引っかけられたほうがまだましだ」
　ため息をつき、極力足もとを見ないようにしながら、爪先で土まんじゅうを隅に押しやる。
　夜のうちに一度隊舎に戻ってきて、得意のまじないを仕掛けていったのだろう。あいかわらず、異常なまでに小心で迷信深い男だ。
　ウェーウェこと、元大膳部の高官にして鳳騎兵の一人ウェッド・ウェッド・ウーマは、ここしばらくジントール中を逃げ回っていた。
　何でも、出世の道がとっくに閉ざされている仕官の道は諦めて、そろそろ実家の家業を手伝えと口やかましく父と兄から言われているらしい。
　本人いわく、脅されている。
　一月ほど前から、みんなが寝静まった真夜中にひそかに使者がきていると主張するのだが、モートはお目にかかったことがない。
　そしてついに十日前、
「うちの家族の場合、逃げれば逃げるほど、危険な手段で追いかけてくるんだ。かといって、いったん捕まれば、二度と実家から出してもらえない。次は

脅しの矢やしびれ薬ですむかどうか。もし私が二度と戻らなかったら、鎮魂の香を三日三晩捧げておくれよ」

すでに魂が抜けたような顔でそう言い残して、雲隠れしてしまったのだ。

どこの世界に、ちょっと家の手伝いをさぼったからといって息子を殺そうとする親がいるというのか？　扉に刺さった矢なら、きっとどこかの演習の流れ矢に決まっている。

とはいえ、ウェーウェは大事な部下の一人、行方が気にならないわけはない。心配顔のモートを、ヴァイレンは豪快に笑い飛ばす。

「心配いらんわい。ああいうやつに限って、踏んだって殺したって死なん。まったく、いつまでたっても大人になれんやつだ」

「本当にな……」

お前とどう違うんだ、とモートは扉の隙間から、来月で四十八になる酔いどれをにらんだ。

「夏至の市に行ってくる。もしランが戻ったら、豆のさやを剝いておくように伝えてくれ」

答えの代わりに、ばたんと床に倒れる音と、いびきらしき爆音が聞こえてきた。

ライラックの月に入り、たわわに実ったベリー類が城の背後にそびえるクルル山を赤や紫に染めるころ、冬大陸のジント王国は初夏を迎える。

王都ジントール。

ジント城に一番近い広場では、今夜に迫った夏至祭りにそなえて大きな市が開かれていた。

今日は、共通暦でいうところの夏至の日だ。

市には、北国の夏至祭りに欠かせない、色とりどりの花束はもちろん、準備が間に合わなかった家庭向けに、夏至祭りの食卓を飾る料理を売る出店がところ狭しと並んでいた。夏大陸からはるばる訪れた小サーカス団や、春大陸の芝居の一座も小さな小屋をかけている。

今までどこに隠れていたのかと思うほどの人波で、広場は混雑していた。

ジント人が穴熊と揶揄される理由の一つ――いわく、エルダーベリの太陽の光につられて起きてきて、ミモザの春風に吹かれてあくびをし、ライラックの夏至のご馳走の匂いでやっと目を開ける。

香草とあえたニシンの酢漬け。雷鳥のくんせい肉。山羊のチーズに、ノロ鹿と木苺のパイ。夏大陸の香辛料をまぶして焼いたキジ肉。この日だけに供される、全蕎麦粉の黒クルッド。もちろん、ジント人の大好物、食後のラクピン（芋を乳と砂糖で煮詰めた菓子）も欠かせない。

それぞれにいい匂いをさせる屋台の前を通るたびに、モート・ハドリンの腹がぐうと鳴る。

（もう少し……今夜までの辛抱だ）

モートは口許をぬぐうと、なるべく屋台を見ないようにして早足で広場を歩いた。騒がしい祭りの爆竹の音があとを追う。

部下たちに夏至の料理を作ってやろうと、数週間前から厳しい節約生活を送ってきたのだ。

主食のクルッドにはいつもより多く安いじゃがいもを混ぜるようにしてきたし、肉料理は三日に一度に減らした。ニシンも雷鳥も、ラクピンの材料も、すべて値切りに値切って確保してある。

あとは、隊舎に戻って料理をはじめるだけだ。出来合いの総菜を買う誘惑につられるほど、甘っちょろい貧乏生活は送っていない。

モートは、懐から財布を取りだすと、そろりと中を覗いてみた。無惨にやせ細った皮袋の底に、虎の子の銀貨が二枚と、五分銅が三枚入っている。

「使うべきか。使わざるべきか……」

モートは深刻につぶやくと、頭のなかにいつもある借金返済予定表を、ふたたび思い返した。

ふた月前に起こったリアハン銀鷹事件の後始末やら、出来の悪い部下の不始末やらで、結局隊がジント国王に作った借金は三十五万ダレルを超える。財

務長官に泣きついて何とか利子だけは免除してもらい、長期返済計画を立てたが、毎月の支払いでまったく首が回らない。

もしこの金を使えば……。

モートはごくりと唾を呑みこんだ。本来来月の返済分に回す金だ。使うなら、当然ほかの経費を切り崩さなくてはならない。たとえば、来月の食費から。

さんざん迷ったのち、残った金で蕎麦粉と酢漬けに風味を加えるディールの香草だけ求めることを決意した。

出店の一つで香草を買い求め、あとは顔見知りの粉屋に蕎麦粉をとりにいくだけというときだ。

突然、広場の一角がわあっという喚声に包まれた。何事かと振り返ってみると、何十人もの群衆がもみくちゃになって乱闘している。

モートは、騒ぎの中心に向かって走りだした。

すわ、喧嘩か。不審者か。

頭より先に身体が動く。物資を値切る以外にとりえなど何一つないが、これでも鳳騎兵にして、ジント王国の王軍十隊長の一人だ。

ジント王軍第一分隊、通称鳳騎兵隊（フィバレニードウイエ）。

――かつてジント王国には鳳凰（フィンバレン）がいた。

春夏秋冬の四季大陸。そのうち、冬大陸の北端にあるジントで語り継がれる、嘘（うそ）のような伝説だ。

太古の金属インブラでできたからだを持つ、創造主の子供。大鳥の姿をしていながら、言葉をしゃべり、妙（たえ）なる詩歌をうたう。

かつて鳳凰はジント王と鳳騎兵隊に騎乗を許し、地上におけるすべての栄光と、四季大陸全土の覇権（はけん）を王に与えた。創造主の御子でありながら、鳳凰が世界最古にして、最強の騎獣とされるゆえんである。

その後突如として姿を消してしまった鳳凰。それから二千年、鳳凰は子供ですら信じないお伽噺（とぎばなし）と化し、ジント王国は四季大陸でも下から数えたほうが早い弱小国となり下がった。

今やジントールの人々はこう言う。
——ジントで役に立たぬもの二つ、雪かきの箒（ほうき）と鳳騎兵隊。
モートこと、ガド通りの靴屋の娘モーティファーレ・ハドリンは、今や王軍のおみそである鳳騎兵隊初の女性隊長なのだった。
だが、ほとんどのジント人は知らない。
ジントの空に鳳凰が戻ってきたことを。

騒ぎの中心、広場に設けられた円形舞台の前に到着する。
「おーい、いったい何の騒ぎだ！　ここは公共の広場だぞ。王騎兵隊の警備兵が来る前に鎮まれ！　王騎兵隊は、鳳騎兵隊（ヅ）と違って怖いんだぞっ」
声を張り上げても、きゃあきゃあと黄色い悲鳴があがるばかりで、騒ぎが収まる気配はない。
落ち着いて周りを見てみると、若い女ばかりではないか。ただの乱闘ではないようだ。

「ぎゃあーっ。私よ。私のよー！」
断末魔のような絶叫と共に後ろから押され、わ、とよろめいたモートの顔面に、何かが真正面から飛んできて、ささやかな鼻を強打する。
とっさに受けとったそれは、大きな楢（なら）の葉っぱに、真っ白なユーフォビアの花と鮮やかな紫色のライラックで編まれた花冠だった。鼻先に、甘い香りがただよう。
ぽかんとしているモートの周りで、どっと笑い声が起こった。
「駄目だよ、受けとっちゃあ。お城の騎士さん」
見物人たちの列から、苦笑いをしながらおばさんが、花冠をかぶせてくれる。笑い声が大きくなった。
「ほかの男どもはみんな逃げてんだろ？　あんた、やっちゃったんだよ。坊や」
「ああ——」やっと合点がいく。
ジントの夏至祭り名物、花冠争いだ。
ここ数年、隊にかまけて参加する機会がなかった

ので、すっかり頭から抜けていた。

夏至の寸劇がはじまる前、幸運にも花冠を受け取った女性は、その年の夏至の乙女に選ばれる。夏至の乙女に選ばれることは、本来ジントの女にとっては一生ものの名誉なのだが――。

やっちゃった。

モートは悲しい気持ちで自分の格好を見下ろした。継ぎはぎだらけの不格好なマントに、かがり縫いの技術が未熟なせいで糸がほつれた胴着。もちろん、縫ったのは自分だ。

長年はき続けて伸びてしまった革の軍靴は、何度も縫い直したために、爪先が窮屈で痛くなる。ぼろぼろの鞘に入った剣は、やっと質から戻ってきたが、ここ数ヶ月研いでもいない。女に見えないのはともかく、せめて騎士に見えたのが幸いだ。

鳶色の髪を短く切り、女にしては背が高いせいか、モートを見てすぐに女だとわかる者のほうがめずらしい。二十五歳のそばかす面をごまかせる白粉もなかろうと、化粧すらしていない。

広場の舞台では、軽快なバイオリンの音色と共に〈夏騎士と冬騎士〉の寸劇がはじまっている。

冬大陸で広く知られる伝承をもとにした劇だ。

目の前では、純白の甲冑に炎を模した赤薔薇の首飾りをした夏騎士と、漆黒の甲冑に黒薔薇の首飾りをした冬騎士の剣舞が繰り広げられはじめた。

それぞれの季節をあらわす二人の騎士のあいだで、研ぎすまされた剣と剣がぶつかり合う。刃を潰していない真剣だ。

バイオリンの調べに乗って、鍔が鎧をかすめるたびに火花が散る。

明るい日の光に焦がれる冬騎士は、ある日思い余って、光の乙女ともいわれる夏至の乙女を誘拐する。

だが乙女には、夏騎士という恋人がいた。夏騎士は乙女を取り戻しに地底の国におもむき、戦いの末に夏至の乙女を勝ち取る――。

単純明快な筋書きだ。

ジント山から吹きおろす力強い初夏の風が冬を春ごと追いやるように、夏騎士はこうやって公衆の面前で冬騎士を打ち負かす。そして、ジント人が待ちに待った短い夏に、やっと季節が明けわたされるのだ。

二騎士は、顎まですっぽり隠れる兜と鈑金甲冑で全身を覆っていて顔は見えない。

モートはほうっとため息をもらす。

（それにしても、今年は夏騎士も冬騎士もずいぶんな手練だな）

ことに、夏騎士の剣さばきときたら、まるで白い猛禽が舞うかのようだ。

ジント王国は、弱小国ながら、数々の武人を輩出していることで知られている。

夏至の寸劇は、毎年王軍から選りすぐりの騎士が演じることになっていた。特に夏騎士に選ばれると、王の射手と呼ばれる称号を授けられ、将来の出世が約束されることになるのだ。

モートはふと首をかしげて、さっきのおばさんに訊ねる。

「そういや、何で男は花冠から逃げるんだっけ？」

「あんた本当にジント人かい？」おばさんが呆れたようにモートを見返した。「そりゃ決まってるだろ。夏至の花冠は女のためのもんだよ。男がまちがって受けとったら、そりゃあんた、婚期が遅れるか、女難の前兆じゃないか」

「……」

モートはそっと心の耳を閉ざした。

おばさんに背中を押される。

「さあ、いっといで！　騎士だろうが男だろうが、今年はあんたが夏至の主役さ」

群衆の輪から無理やり押し出されたモートは、二、三度前につんのめって、石畳に顔から突っこんだ。

ふたたび思いきり打ちつけた鼻をさすりさすり、真っ赤な顔を上げる。

ぎぃん、と不気味な音を立てて、剣がモートの頭

上で交錯した。間の悪いことに、騎士たちの剣舞の真ん中に転がりでてしまっていた。

隊長とは名ばかり、モートがまともに扱える刃物といったら包丁くらいで、剣の腕はからきしだ。

二人の騎士が白と黒、色違いの兜の奥からモートを見下ろす。冬騎士のほうは、ことに驚いたように一瞬身じろぎをした。それはそうだろう、夏至の乙女かと思ったら、貧相な騎士が花冠をかぶって転がり出てきたのだから。

夏騎士の猛攻で剣舞が再開された。

目にもとまらぬ速さで振り抜かれた剣が宙に華麗な輪を描く。危うく銅に剣の切っ先が届くところを、冬騎士が渾身の力でなぎ払う。

これが実戦なら、すでに死人が出ていてもおかしくないほどの立ち合いだ。二人の騎士が繰り出す剣技にも、次第に熱がこもりはじめる。

それを見守る群衆の歓声も、二騎士の剣にこもったうねるような熱につられて昂ぶっていった。モートは状況も忘れて、地面に尻もちをついたまま、うっとりと剣舞に見入っていた。

勝負はあっけなくついた。

冬騎士が見せた隙は一瞬だった。だが夏騎士はそれを見逃さなかった。利き手の籠手に、容赦ない斬撃を浴びせる。

夏騎士の苛烈な一撃は、冬騎士が剣を取り落とすのに十分だった。

剣が高い音を立てて、石畳に転がる。

迫真の演技だ。

「夏騎士、よくやった！」

観客がわっと大歓声をあげる。モートは微笑んだ。

（創造主に讃えあれ――季節の交代だ）

夏騎士は、モートに向かって白薔薇の首飾りを差しだす。騎士に騎士が跪く滑稽さに、やんやの喝采が起こった。

「なぜそんな格好で、こんなことに？　あなたのなさることは、時々本当に訳がわからないですね」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。